

# 先人たちが残してくれた

## 「災害の記憶」を未来に伝えるⅢ

－ 命と文化遺産とを守るために－

【由良町・印南町】



和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会

# この冊子を読まれる皆さんに

平成23年(2011)9月の紀伊半島大水害によって、たくさんの尊い命と財産(文化遺産を含む)が奪われました。今後も洪水や土砂災害、さらに東海・東南海・南海3連動地震や南海トラフ巨大地震の起こる可能性が指摘されています。

こうした災害から自らの命と財産(文化遺産を含む)を守るための活動を、日ごろから継続しておこなっていく必要があります。その一環として、わたしたちは災害が起こる前に、地域に眠る過去の「災害の記憶」を呼び起こし、地域の人々に伝えていくことが必要であり、津波や洪水による浸水が予想される地域に残されている文化遺産を把握することも大切であると考えています。

和歌山県域には、地震津波被害や洪水被害の想定される対象地域が広範囲に及んでいることを踏まえ、平成28年度は由良町・印南町を対象に、「災害の記憶」の発掘と文化遺産の所在確認調査をおこないました。この冊子では、その調査成果の一部を紹介しています。

この冊子が、これから起こりうる災害に対して、自らの命と身近にある地域の貴重な文化遺産を守っていく活動への一助となることを期待してやみません。

平成29年1月17日

和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会

委員長 伊東 史朗

\*表紙は紀伊国沿海地図(部分・個人蔵)  
上段は由良湾付近 下段は印南浦～島田浦付近  
\*本書の作成者は次のとおりです(五十音順)  
木村修二 阪本尚生 砂川佳子 藤 隆宏 藤本清二郎  
浜田拓志 松下正和 三本周作 吉村旭輝 前田正明(編集)

## 目 次

この冊子を読まれる皆さんに	2
この冊子で取りあげる過去の災害	3
1707年宝永地震津波の記憶(印南町印南)	4
1854年安政南海地震津波の記憶(印南町印南)	6
1854年安政南海地震津波の記憶(由良町里)	8
1946年昭和南海地震津波の記憶(由良町網代)	10
宝永の教訓, 昭和に届かず(印南町印南)	12
今回おこなった調査の内容	14
命と文化遺産とを守る ― 地域での実践 ―	15
水濡れ文書の吸水乾燥方法	16

### この冊子で取りあげる過去の災害

**宝永地震津波** 宝永4年10月4日(グレゴリオ暦1707年10月28日)午後2時ごろ、静岡県の御前崎沖から四国沖を震源域(M8.6と推定)とする、有史以来の最大級の地震とそれに伴う津波が発生しました。和歌山県域でもかなりの被害があったと想定されていますが、被害の状況を伝える記録はあまりありません。

**安政地震津波** 嘉永7年(安政元年)11月4日(グレゴリオ暦1854年12月23日)午前9時ごろ、遠州灘沖を震源とする東海地震とそれに伴う津波が発生し、その約32時間後の5日午後5時ごろ、紀伊半島沖を震源とする南海地震とそれに伴う津波が発生しました。いずれもM8.4と推定され、この地震津波によって、多くの被害が出ました。これに関する記録は、比較的多く残されています。

**昭和南海地震津波** 昭和21年(1946)12月21日午前4時19分、潮岬南方沖を震源域(M8.0)とする地震とそれに伴う津波が発生しました。宝永や安政の地震津波に比べて、地震動も津波も弱く、地震そのものの規模は小さいものでした。しかし、この地震津波による被害は、中部地方から九州までの25府県に及び、死者・行方不明者1,443人(うち和歌山県269人)、建物全壊1万1,661棟(うち和歌山県969棟)、家屋流失1,451棟に達しました。



(背面)



(背面と左側面)



(正面)

「高波溺死靈魂之墓」碑  
印定寺蔵

所在地 印南町大字印南2259番地 (印定寺境内)  
 関連する災害 宝永地震  
 建立された年 享保4年(1719)  
 材質 石製(花崗岩)  
 サイズ  
 本体 幅 39・7 cm 高さ 61・0 cm  
 奥行 38・7 cm  
 基壇 幅 48・7 cm 高さ 7・5 cm  
 奥行 45・0 cm



享保四己亥年十月初旬四日建之

(右側面)

限山口嶺

当浦浪之高、札之辻至六尺余、印定寺門柱及式尺余、

女流死ノ輩凡百七十有余也、近見遠聞人最哀思侍者哉

(背面)

皆宝永四丁亥歲初冬四日午下刻有大地震而山崩地裂、

同末之上刻凹凸而津波揚来、家財牛馬不及言、老若男

(左側面)

花 (勢至菩薩)

孔 (阿弥陀如来) 高波溺死靈魂之墓

孔 (觀世音菩薩)

(正面)

【原文】



印定寺山門と解説板

印南町印南の印定寺(浄土宗)には、宝永4年(1707)の宝永地震津波で亡くなった人々を供養するとともに、津波の記憶を後世に伝えるために、13回忌に当たる享保4年(1719)に建てられた「高波溺死靈魂之墓」碑(写真左)と高波溺死靈名合同位牌(写真右)が残されています。とくに、「高波溺死靈魂之墓」碑の背面には、村人みんなが知っている場所(札之辻、印定寺、山口村境)を基準に、宝永の地震津波の到達点を示している点が注目されます。

宝永地震津波から147年後の嘉永7年(1854)11月5日、再び大地震津波(安政南海地震津波)が印南を襲いました。このとき、印南では死者は出なかったと伝えられています。

明治の初め、有田小学(現、串本町立串本西小学校)に赴任した印南出身の瀬戸工は、故郷を出る時、「前車の覆るは後車の戒め」(先人の失敗は後人の教訓となる)と心得て、「高波溺死靈魂之墓」碑に記された文章を書き写し、肌身離さず持っていました。印南の人々は、この石碑の存在によって、忘れかけていた「災害の記憶」を、折りに触れて蘇らせることができたと言えるかも知れません。

平成26年(2014)、印定寺山門前に解説板(伝承板)が設置されました。石碑に刻まれた記憶を、改めて見直そうとする取り組みが始まっています。



高波溺死靈名合同位牌  
印定寺蔵

【現代語訳】

(正面)

(サ)

(キリーク) 高波溺死靈魂の墓

(サク)

(左側面)

宝永4年10月4日午後0時半ごろ大地震があり、山が崩れ、地が裂けた。午後1時半ごろ、でこぼこした津波が、海から揚がって来た。家の財産や牛馬はもちろんのこと、老いた人や若い人、男や女も溺れて亡くなった人は170人を超えるぐらいである。津波を経験した人も話を聞いただけの人も、どれほど深い哀しみをもっているだろうか。

(左背面)

印南浦の波の高さは、札之辻(高札が立てられた辻)で約180cm、印定寺山門の門柱では約60cmに達した。津波は、現在の大字山口との境まで到達した。

(右側面)

享保4年10月4日これを建てる。



(全体)



(冒頭・拡大)

### かめや板壁書置

印南町教育委員会蔵

- 所在地 印南町大字印南1986番地(いなみっ子交流センター)
- 関連する災害 安政南海地震ほか
- 制作された年 安政元年(1854)以降
- 制作した人 かめや(亀屋)弥兵衛
- 材質 木製(杉材)
- サイズ 縦184.0cm 横229.0cm 厚さ1.0cm



亀屋先祖代々の墓  
(要害山上)

左の写真は、嘉永7年(1854)11月5日に発生した安政南海地震津波で浸水被害を受けた、亀屋弥兵衛宅の蔵の内壁です。蔵は安政地震津波の後も、慶応2年(1866)の台風による高潮災害、昭和21年(1946)の昭和南海地震津波にも耐えましたが、同51年(1976)にその役割を終え、解体されました。しかし、弥兵衛が記した書置(板壁の一部)は、過去の津波災害を伝えるものとして、現在も大切に保管されています。



印南祭と亀屋の蔵があった場所  
(本郷地区)

〔原文〕  
嘉永七  
安政元寅歳

かめや  
弥兵衛

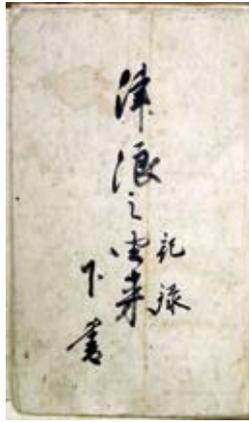
右は書置之事、扱寛六月八日  
大じしん并す、波、扱又十一月  
四日には城に大つなみ行、川口よりはしつめ  
迄皆なかれ、家は八幡様前へ  
坂本・本郷皆家なかれ、其時東宮  
上へにけ、寔になんき致候、扱浜方  
も皆々なかれ、光川・宇杉・上ヶ三ヶ村  
は波はいり候共残り候  
其時此蔵は残り、其あと皆  
なかれ候、此蔵むね切つかり候  
并末石・家石かけ皆なかれ候  
扱手前知らせは、六月八日大  
じしん・す、波御座候、其  
時ゆたん致、皆なにもかも  
なかし候、扱百八拾載めてく  
ると之事、手前には知らせ御座候  
其時なにもかも出、此上へあかる  
可候、其時諸村に申しに御座候  
先はあらく書置之事、以上  
慶応丁歳八月八日  
扱、大波・大風・大水・つなみより  
十三年め此町へ波あかり、  
印南裏半分なかれて  
右之通、此板古也候て、書き直し置候、以上

〔現代語訳〕

嘉永7年6月8日(正しくは15日)に大地震(伊賀上野地震)と鈴波(小さな波)があった。その後また11月4日には、城(要害山)に大津波がきて、川口から印南橋まですべて流され、家は印南八幡神社まで、坂本・本郷の家はみんな流れた。津波が来た時は、東宮の上へ逃げたが、本当に大変だった。それから、浜方もすべて流され、光川・宇杉・上ヶ(あげ)の3か村は波が来たけれども流されずに残った。その時この蔵は残ったが、それ以外はみんな流れた。この蔵も棟まで浸水した。また、礎石・家・石垣もすべて流された。予兆が6月にあつたにも関わらず、その時は油断して何もかも流してしまった。ところで、津波は180年ごとに来ると言われており、事前の予兆がある。その時は、何もかも出してこの上へあがりなさい。大地震・大津波がきたら、諸村で死者がでるだろう。まずは、概要を書き残して置く。  
慶応3年8月8日  
さてまた、津波から13年目に、大波・大風・大水があつてこの町へ波があがり、印南浦の半分が流れて、この板も古くなったため、右の通り書き直しして置く。

■ 関連する災害 安政南海地震  
 ■ 作成された年 安政元年(1854)  
 ■ 作成者 毛綿屋平兵衛(横浜村)

■ 材質 紙製(和紙)  
 ■ サイズ 縦24.4cm 横16.3cm



(表紙)



本文(部分)

津浪之由来(記録)下書  
 和歌山県立文書館蔵



由良川河口周辺図

安政南海地震津波の被害を受けた地域では、地震や津波の発生前後の状況(気象や社会状況)や被害状況、そして教訓などを綴った記録が体験者によって作成されました。それらは、作成された各地における地震津波経験を現代に伝える貴重な情報源です。由良町でも、こうした記録が何点か伝わっています。なかでも著名なのが、今回紹介する「津浪之由来(記録)下書」です。すでに、『由良町誌』史(資料編(870～879ページ)などでも原文が掲載されていますので、ぜひともじっくりお読みください。ここでは、11月5日の南海地震津波発生時の部分を現代語訳にしました。

この史料によれば、津波の高さは、海に近い網代浦高札場あたりで約7.2mだったとあります。この付近の海拔は約1.6mなので、津波の高さは約9mに達したことになります。横浜村の低い所(計測地点不明)で約4.5～4.8mとあり、宇佐八幡神社付近では、本殿前の石段の6段目(地面からの高さ約1m)まで波が来たとあるので、海拔を加えると津波の高さは約5mとなります。最終的に、波は由良川を遡って、現在の入路交差点付近からJRの線路が川を越えるあたりまで到達しました。

【現代語訳】

さてまた翌11月5日午後5時ごろ急に土けむりが吹いてきたかと思うと、大地震が揺れだした。まるで大地をひっくり返すかのように、家の壁や塀や屋根瓦を飛ばしながら大変長い時間揺れていた。男も女も子供も(建物の倒壊の恐れのない)広場にみんな寄り集まった。大地震の時は地割れが発生すると聞いていたので、板やたたみなどを敷いた。泣き叫んでいる者の中には氏神の八幡様へ祈ったり、念仏を唱えたりと、全員生き心地がしなかった。そうした所へ、海の沖の方から大音響がドタンドタンドタンとしばらくの間鳴り響いてきた。あれは雷の音だろうか、はたまた海が裂ける音かと怪しみ、ひよっとすると聞き伝えていた津波がやってくるのではとおのきなながらも、余震の合間を見てはそれぞれの家財道具を移動させていた。するとその内、早くも沖の方から大津波がまるで山のように、音もなんともたえようがないほどに耳に響き、激しい勢いで水面が満ちてきたので、みんな泣き叫びながら、持っていた荷物を投げ捨て、命の限り逃げ走った。足の速い者は里村まで逃げてゆき、遅い者は宇佐八幡神社の高みや東側の高み、宮山や北山などへ逃げ、ようやく命だけは助かり、危難から逃れた。中でも横浜村だけでも死亡した男女が17人もいた。家屋は約100軒あったうち80軒あまりが流され、17軒だけ残った。この日の夜に余震がまた1回あり、その後も夜明けまで14～15回揺れた。津波は深夜0時まで7回やってきたが、夕方のもが一番大きなもので、それから段々小さくなっていったように見えた。



網代浦高札場跡と津波高の指標となったビヤクシン(矢印)



宇佐八幡神社本殿前の石段(矢印は推定津波到達点)

# 1946年昭和南海地震津波の記憶

## 由良町網代



由良町中央公民館、手前に見えるのが標石



標石の裏面

### 由良町中央公民館標石

由良町中央公民館標石の裏面に、昭和21年(1946)12月21日未明に起こった昭和南海地震津波の浸水高が、標高約3.5mの高さに刻まれています。この場所は、昭和の初めに臨港線鉄道駅建設でできた埋立地でした。昭和19年末には海軍機雷学校になり、終戦後も残っていた兵舎などは、この地震に伴う津波のため流失してしまいました。地震・津波から30年後の昭和51年に中央公民館が建設され、翌年開館しました。

#### 【原文】

敷地経過  
昭和4年 由良臨港土地株式会社  
国鉄 紀伊由良駅開通後 臨港線  
敷設用地ト共ニ 此ノ土地ヲ埋立スル  
昭和19年末頃ヨリ 終戦マデ 海軍  
機雷学校用地トナル  
昭和21年12月 南海地震ニヨル津  
波ノタメ 兵舎等ノ建物流失スル  
昭和51年 紀州不動産株式会社ノ  
所有ニナツテイタモノヲ 由良町ガ買  
受ケテ 公民館ノ建築ヲ行ナツタ

- 所在地 由良町大字網代248番地の12 (由良町中央公民館敷地内)
- 関連する災害 昭和南海地震
- 建立された年 昭和52年(1977)
- 材質 石製(花崗岩)
- サイズ 幅 153.5cm 高さ72.0cm 奥行25.4cm

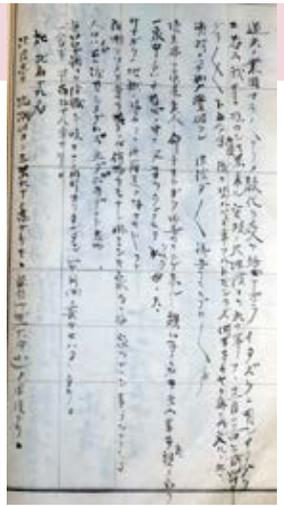


南海トラフ巨大地震津波浸水想定域と昭和南海地震津波浸水域とを重ねたもの(由良川河口周辺)  
■：南海トラフ巨大地震津波浸水想定域 ■：昭和南海地震津波浸水域  
(大江清氏作成地図を基に作成)



昭和南海地震で網代地区の人々が避難した念興寺

#### 念興寺記録



昭和南海地震津波により、網代地区と横浜地区では死者17人、行方不明者2人の犠牲者が出ました。

今回の調査で、念興寺(網代)の住職了圓和尚が残した当時の生々しい記録が発見されました。津波と寺に避難してきた人々の様子を、「さながらの地獄の姿か? 修羅道の姿なりや?」と表現しています。

住職らは、その日の朝から1か月間炊き出しを行い、用意した食事は1,150人分に及びました。念興寺は、網代地区の避難・救援の拠点になったようです。

昭和南海地震から70年が過ぎた今日、地震・津波の経験者は少なくなっています。被災者から話を聞くなど、この地震・津波の経験を掘り起こし、伝えていく必要があるのではないのでしょうか。



地震直後の網代・横浜・南地区  
由良町教育委員会蔵

【原文】  
過去ノ業因マチノナリノ教化ヲ受ケ給リナガライタズラニ明シイタズラ  
ニ暮ス我等ニ恐ロシキ方便果来ル安政ノ大津波ヨリ九十年ア、十二月二十一日午前四時半  
グラノト五分余 後ニ恐ルベキ事アルトモシラズ何事モナキヤト床ニ再ヒ入ルノ時  
漁村ノ平和ノ夢破ラレ 津波ダノ御寺ニニゲル 親ハ子ノ名ヲ夫ハ妻ヲ老親ノ名ヲ  
漁夫婦子供達老人命チカラガラ御寺ニニゲ来ル 一家中ノアツタ嬉ビノ中ニ又子ヲウシナヒテクルウ母・夫、  
サナガラノ地獄ノ姿カ? 修羅道ノ姿ナリヤ?  
夜明ケソメテ寺ヲデレバ何物ヲモナシ淋ミシキ家々ノ姿家ヲナクシ妻子ヲナクシタ  
人々ハ出(イズ)ル涙サヘモヌグハズ然ダボウデント立ツ  
当日早朝ヨリ住職寺族二三ノ同行ヨリタキダシ一ヶ月間ノ長キニハタリタリ。  
一食事 千五百人分ナリ。  
記 死者十九名  
津波高サ 満潮時ヨリ三米九十ノ高ナリキ。前後十回(大中小)ノ津波ナリ。

宝永南海地震から239年、安政南海地震から92年後の昭和21年(1946)の冬至の前日12月21日未明に再び南海トラフを震源域とする地震が発生しました。敗戦から1年4か月後、世情不安な時期でした。

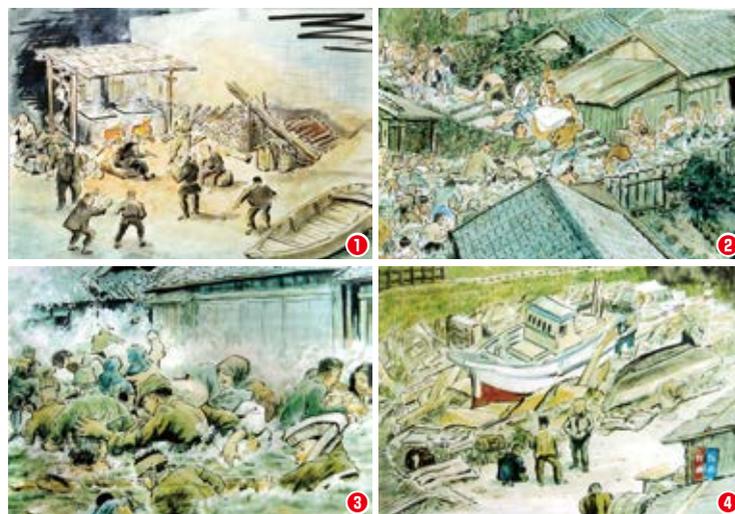
震源は潮岬南方沖で、マグニチュードは8.0、過去の南海地震の中では最小規模の地震でした。建物が倒壊するほどの激しい揺れはなく、家屋の損壊による犠牲者はありませんでしたが、避難途中に16人の犠牲者が出ました。

未明の大きな揺れであったため、大半の住民は起きて避難準備はしたものの、津波が来ることを知っていた人は少なく、避難せずに様子を見ていました。そこへ海の異変に気がついた塩炊きの人々や海岸近くにおいて津波の襲来に気がついた人が、「津波や!」と、ひしり(叫び)ながら知らせに回ったので、人々は避難を始めたのです。侵入した津波は、浸水深(浸水域の地面から水面までの高さ)は低いものの流れが速く、避難途中の人々は足をすくわれて転倒したり、流木に絡め取られたりして溺死(くでし)しました。多くは老人や子ども、それに女性でした。『印南町史』によれば、住民の4割が逃げ遅れ、家に取り残されましたが、浸水深が低く、家屋の破壊は一部に止まったため、屋内にいたことで助かるという逆説的な結果になりました。

宝永の大きな犠牲から得られた「大地震のあとには津波が来る」という教訓は、147年間伝えられ、安政時の避難を完ぺきな成功に導きましたが、昭和には伝わらず、宝永の悲劇が繰り返されてしまいました。

### 昭和南海地震津波 印南地区人的被害

死者	16人
重軽傷	32人

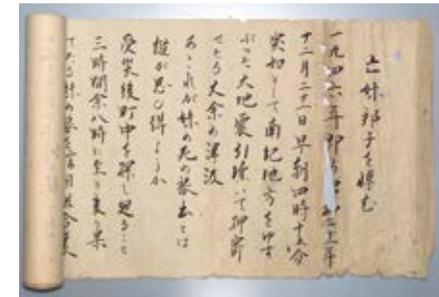


浦森勉氏が描いた  
津波来襲時の様子  
個人蔵

- ① 浜辺で夜通し海水を煮詰めていた「塩炊き」の人々が、津波の襲来を察知して住民に知らせに回った
- ② 要害山へ避難する人々
- ③ 浸水のなか避難する本郷地区の人々
- ④ 津波によって印南川を遡り、梅ノ坪付近まで流された漁船

被災が戦後すぐであったためか写真はなく、災害の記録としては、『印南町史』に収録された被害の程度や浸水域など被災者の体験記1件(わずかに3ページ)が残されているのみです。個人の記録も、被災後すぐの昭和22年1月17日に日下善右衛門(くさかせんえもん)氏が記した「亡妹邦子を悼む・郷土津浪史」(巻物 縦19.8cm、横595.8cm)と、浦森勉氏が1980年代に記憶を頼りに描いた被災画(一枚物 縦20.9~21.1cm、横29.7~29.8cm)4枚が残されているのみです。

### 日下善右衛門氏の記録 個人蔵



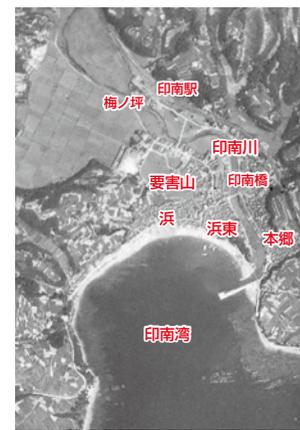
「亡妹邦子を悼む」(冒頭)

善右衛門氏は大正15年(1926)生まれで、被災時は20歳でした。2歳下の妹邦子さんは、家族よりもいち早く逃げ出し、途中津波とともに上陸した流木に巻き込まれて亡くなりました。

「十九の蕾(つばみ)開花せずして不測の災害に変死したとは思うだに 惜愛の絆 黙し難きは 兄一人のみであろうか」と妹への深い哀惜(あいせき)の情を「亡妹邦子を悼む」に綴り、続いて「小生ここに郷土を襲った津浪史の一端を記して後世の為 何かの参考に供せられるならば幸甚である」と「郷土津浪史」を記しています。



「郷土津浪史」(全文)



昭和南海地震直後の印南  
(1947年10月4日米軍撮影の空中写真をもとに作成)

「郷土津浪史」では過去の津波被害記録を引用し、家族の避難や津波襲来の様子を「12,3分で襲来、秒速13m」と詳細に描いて、最後に「津浪の消極的な処置法としては、川辺は成るべく早く高所へ避難すべきである。浜東は避難場所が遠い故、地震後直ぐ逃げるべし。今度の津浪にて死者の大多数は、避難途中にて失敗したのである。もし逃げるとすれば新地(川沿いの地名)を通るべきではない川よりの浪が速い故」と教訓を述べ、「これを後世に伝え、再びかかる不幸の発生しないことを希望する」と結んでいます。

# 今回おこなった調査の内容

## 「災害の記憶」の発掘

「災害の記憶」は、さまざまな形で残されています。紙に記録されているほか、誰でも見られるよう、寺社の境内などに災害の教訓を石や金属に刻んだ記念碑が建てられることもありました。文字には記さず、言い伝えられることもあります。

現在の由良・印南両町域は、過去の地震や津波で大きな被害を受けています。今回の調査を通じて、地域の方々のご協力のもと、その時の記憶を伝える様々なものや場所に触れました。右の写真は、かつて寺があった場所を訪れたときの様子です(印南町印南にて)。地震津波により、この寺の檀家の多くが被災し、他所への転居を余儀なくされたといわれます。この寺はのちに、その転居先近くに移転することとなったのです。



## 身近にある文化遺産の所在確認

不幸にして文化遺産が被災してしまった時、それらを保全する取り組みが必要となります。その場合、あらかじめ、どこに、どのような文化遺産があるかを把握しておかないと、スムーズな対策をとることができません。今回の調査では、地域の寺社などを訪ねて、文化遺産の採寸・撮影を行い、記録化する作業も実施しました。

由良町域では、中世のある時期から、親鸞聖人を宗祖とする浄土真宗の信仰が広まりました。調査を通じて、こうした真宗を特徴づける文化遺産の数々を確認することができました(右の写真上段<由良町衣奈にて>)。

一方、印南町域では、浄土宗の寺院が数多く所在します。極楽に導く阿弥陀如来や宗祖・法然上人の肖像をはじめ、浄土宗特有の文化遺産を記録するとともに、浄土宗以前の歴史を物語る仏像なども確認されています(右の写真下段<印南町印南にて>)。

文化遺産は、地域の歩みを今に伝える貴重な歴史の証人なのです。



# 命と文化遺産とを守る — 地域での実践 —

災害から命を守るためには、過去の災害を歴史的・科学的に研究すること、それを身近な問題として地元住民が共有し、避難方法の検討など実践的な活動に広がっていく必要があります。

## 印南中学校津波研究班(印南町)

2015年度は、かめや板壁の解説を中心として、印南湾に侵入する津波シミュレーションの流速分布図作成、昭和南海地震体験者の聞き取り調査、小学生向けの「楽しく学ぶ防災講座」を行いました。2016年度も地元の同体験者からの聞き取りを続けています(右の写真)。

「ぼうさい甲子園」で今年度も含め7回受賞している活動は、阪本尚生教諭の指導のもとで2005年度から始まっています。当初は実物模型やコンピュータを使った理料的な研究でしたが、2011年度から住民向けの津波講演会など、地域への防災啓発活動にも取り組んでいます。また2016年度は、避難ルートの実践的研究など、3年生全員での取り組みもおこないました。



昭和南海地震の体験者への聞き取り  
(2016年8月 写真提供/印南中学校津波研究班)

災害や代替わり、それに伴う家屋の解体などによって地域の文化遺産が散逸・消失してしまうことがあります。そのような時、地元の識者・有志のネットワークや公的機関による支援は、その保全を支えます。

## 由良中学校校舎(由良町)

教室の空間が活用され、地域の歴史資料、漁具・農具・その他の民具、埋蔵文化財などが整理・保管されています。常時の公開はされていませんが、地元小学校の地域学習などに用いられています。整理作業を終えた2012年度の時点で展示物は1,535点、図書は1,590点。由良町教育委員会と、委嘱された地元の元中央公民館長大野治氏等の連携作業の成果です。

\* 展示内容などの詳細は、大野治「由良町文化財整理作業 —ふるさと資料展示— を終えて」(「由良町の文化財」第39号、2012年に収録)に掲載されています。



町内に残る民具・漁具などが整理・保管されている  
第3展示室(民具・漁具室)

# 水濡れ文書の吸水乾燥方法

古い記録・古文書など残しておきたいものを捨てないで済むように、家庭でできる簡単な処置方法を紹介します。ただし、利用できるようになるまで完全に乾かすためには、専門家の技術が必要な場合もあります。

## ⚠ やってはいけないこと

- ・冊子を無理にこじあげない。
- ・天日やアイロン・ドライヤーなどで急激に乾燥させない。
- ・電子レンジでの乾燥も紙を傷める。

## ⚠ 応急処置にあたって

自身ですべてを行う必要はなく、電気や水道などのライフラインの復旧状況が許す範囲内で対応する。

## ① 作業の前に

- ・エプロンが作業着、あるいは汚れてもいい服装で行う。
- ・マスクは必ずつける。
- ・エタノールを扱う際にはゴム手袋を着用する。
- ・常に換気を行う。(可能であれば除湿器や扇風機、空気清浄機などを活用する)
- ・30分に一回は休憩をはさむ。
- ・作業終了後にうがい、手洗いを必ず行う。
- ・指輪、時計、ブレスレット、ネックレス、ヘアピンなど、文書に損傷を与える危険性のあるものは必ずして作業する。

## ② 用意するもの



ペーパータオル(キッチンペーパー)・エタノール(市販の消毒用)・スプレーボトル(霧吹き)・新聞紙・マスク・使い捨てゴム手袋(薄手のもの)・竹べらや竹グシ・パレットなど

※人体への安全性を第一に考え、NIOSH(米国労働安全衛生研究所) N95をクリアした微粒粒子用マスクがのぞましい。

## 吸水乾燥の手順

### ① 軽い水濡れの場合

直射日光の当たらない、通気性の良い場所で陰干しをする。室内では、扇風機などを利用し空気が循環するようにする。ただし、紙資料に直接風をあてないこと。

### ② 水濡れがひどい場合(応急処置)

① 新聞紙の上にペーパータオルを敷き、文書をのせる。

② ページが開きそうな箇所を確認し開く。開きにくい場合は竹べらを用いる。(すべてのページを開く必要はない)

③ 開いたページにペーパータオルを挿入し、一度冊子を閉じる。表紙の上にペーパータオルをもう一枚置き、その上から軽く押さえてペーパータオルに水分を吸収させる。



ペーパータオルを挟む



文書を閉じた状態



軽く押さえる

④ ペーパータオルを挿入したページを再び開き、ペーパータオルを抜き取る。

⑤ 新しいペーパータオルを用意し、別のページを開き、②～④を繰り返す。繊維の部分の水気をとるときは入念に。あらかじめ水分が取れたらスプレーボトルに入れたエタノールを噴霧。

⑥ 全てのページが開閉でき、手のひらに水分が移らないようになったら完了。あとは、風通しの良い場所で文書を陰干しする。

(歴史資料ネットワーク作成の資料から抜粋して、転載させていただきました)

この冊子を作成するにあたり、由良町、由良町教育委員会、印南町、印南町教育委員会、印南町立印南中学校、歴史資料保全ネット・わかやま、歴史資料ネットワーク、神戸大学、姫路大学、和歌山県教育庁文化遺産課、和歌山県立文書館のご協力をいただきました。このほか、ご協力いただいた個人の方々のお名前については、紙面の都合で掲載することはできませんでした。この場を借りて、お礼申し上げます。

## 先人たちが残してくれた「災害の記憶」を未来に伝えるⅢ

－命と文化遺産とを守るために－

【由良町・印南町】

発行日/平成29年(2017)1月17日

編集/和歌山県立博物館

発行/和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会

〒640-8137 和歌山市吹上一丁目4番14号 和歌山県立博物館内

印刷/中和印刷紙器株式会社

この冊子は、「平成28年度文化庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」で作成したものです。